職人[illegible]本

七十一番上

一

特別
へ4
8053
1

職人歌合畫本　七十一番之上

一

[stamp]

へ4
8053
1

伴信友校合
細野要齋旧蔵

職人歌合畫本

七十一番之上

一

職人歌合畫本

七十一番之上

一

昭和49年10月11日
福田文作氏
寄贈

42 8111

二 番匠 かち
三 かへぬり ひはたふき
四 ときし ぬし
五 こうかき はたおり
六 いもし 筆つくり

七 あめうり さかつくり
八 たうふ賣 もちいうり
九 筆ゆい 山ふし
十 ちゝやき をちらめ
十一 馬かい 皮かはふ

十二 山人 浦人
十三 木こり 草かり
十四 石切 扇をり
十五 帯うり 白い物賣
十六 鈴うり いさゝ保

十七 弓つくり 弦うり
十八 ひきれ賣 かはらけ賣
十九 まんちう賣 あわのこ賣
二十 かゝみとき さいうり
廿一 ろくろし もろひさいく

廿二 さやつくり ゆつるはき
廿三 かさはり けさつくり
廿四 御たゝ河 からかみ

天地ひらけし時よりこのかたおのれおのれか道
をまなひことわさをつとむる其道をさへてなりはひと
す其わさをやかて名つけて吾邦のまことさなり
これは神の道よりも通ひ人のわさも和くれて今度
の光ことなる又さうをとろへたる草の山わける
山家の人なれはしてもそのわさをわすれてをかしく
左右とらへ絶えし所を合はせ歌を月に

趣を出して衆議して判を分かつへし　無
ことなりや

七十一番歌合

題

月

恋

はんさう

我ともはさへ
相国寺へ
みあまれは
管てそ
畑はいん
きら覚

鍛冶

京ごくとのゝより
よおりうちを御
あはらへは大事よは
きみえるらるつまと

か屋大工

世しらハらを
いつくしくて
柱とりてこ
か屋の大く
まいりては
志ら杭とく
してはいりや

ひもの師

はなか
かゝらぬ
たつそき

とぎし

はさらねき
たちとなささとや
ぬしふとひ申さん

はやさい
いまもとを
ある処

ぬし

よげあれ
まづ紙を
うるしげなく

今染し
火どるへきう
こうやさ
まて一しれをあまと
おほきくらす

たてぬきを
あやおり
ぐみて
こよ

ひ物し

ゆかけみも
こ詠ハことに
大なりる
ふかのこめ よ
あはらへ
しるふやら覧

車作り

びきゆう乃
まろてよく
法くまてを
押度きゆ

なへうり

ちり海なへ
かけしまへぐまも
さつらこそ引ける
人あらハ作らせよ
法るをもかけて
さう

さゝ流り

先さけめせかし
すみやまでまゐらす
にこり
あそ
か

伊勢貞丈云昔士農工商共
カナザシト云フモノヲ用テ諸用ヲ
胡粉ニテ書付ル之形扇骨ノ
如クニテ上下同シ大キサニテ上下
ヲ糸ニテトヂコレヲヘタルモノ也
露寺職人尽歌合ニ油ウリノ持
タルモノカナザシ之尤ノ二ノ形表裏
ニ付タル品ノ放レタル之鉄ニテ作タル
モノ也

其心安穏無有怯弱文殊師利是名 菩薩

三寸

長七寸九分ハバ四分弱

凡寸 妙法蓮華経日本相州鎌倉住

鍛冶正宗𢦏

アツサ一分半

一七寸

あてゝなる
もちの海…

夕比井
ら季

あめうり

腰にさす
笛も
山崎は
ら風ら衣

あすかなる
もち海道

月化井
ら季

筆ゆひ

うのけハ
毛なら西
みえぬが
大事にて

むし路う紀

てまでむしろ
かうしまへ
由ざもい
哉

すみやき

宰さいで
ほいまう
多り

をはらめ

あこぜハまいるあひ
てかけるり

むまかひ

かえかひ

山人

よしハ稼より
さむくあり
たるも

浦人

きの[illegible]ちや
東都ハ
をかしき

木こり

草かり

ゆしかんすとて
世よとてあるを
みまくほしよ

ゑぼしおり

今時の浄
ゑぼしハちと
うやて
候

あふぎハは
これつかん
同ふきまてる

あふきこう色

おびうり

はやりこそて
のぞみなれん
いそくしや

白いものうり

百家もおかげも
いろもめせ
いろいろと
よきは
しろいはそ

はまくりうり

ひがのあるハ
いへ乃ちらちて
はらそて
とのやうなる
ひけのなきかな

いをうり

いをハ鯛
あまたくハ
めせかし

ゆみつくり

此ゆみハ
つるをかけ
まはらん
するそ
仁王がへりの大事
あるべき

つるめそハ
声をはゞるもの
せきづるは

はるめうり

ひき物うり

これいなば
がうし
みさい
めせ

かはらけ
うり

あつはらけいめすまし花ら
か庵里あしあて
中すくは登

まんぢううり

家さいまで
あきなひなれき
うりて
さて

我もけさたち
よりきて
くわ屋

ふら鍋みそうり

かミすき
はやりしう
多ぬ
けか

さいあそ
さしちゞへ乃さいを
めしゆへいぬを物の
いきえんもゆそ

よろひさいく

むかしの物ハ
法様うらら
ちらちて

ろくろし

木を巻きて
いろいろの物
をそくなる
いろをせ

さら里川から
志ゆうもく
いなかんこう
めを

抜いうちたもし
あたいうきかは
ゆきうつかさい
う里

かさはり

ゑの雨ふら
ぬ昔しぬ
けふか

あしだ作

目のゆゑん
まちまち
也地
かしや

から紙志

乃書ちと
こハ紙ハ
きらくを
へよ

漉きあミ

この漉床より
出いそきの
みすゐて

左一番　番匠　鍛冶

きしかたはたくみもいまやすみなまさえをも山月のまさかりけり

右

新わまえてふるきころやのたたらつ炉焔りさけしまへ月のさやけさ

左の歌さえをも山月とよくつけられたれども所合よろしき

焔く月あやなくきこゆ右の歌たたら陰おさまりさけ

こ執といへるも月をほめたり傳ることかたれと

も一番の右なるはならべておもふし

くさこそよひとつ木の端つたひつてみの風れはうちんとらん

うらめしや人のこころ見ゆやきさひがきかなふかのそれねば

左右ともにておの月ひときめくらめら　おもしろし　所と
の有るなるへし　持持とす

二番

壁塗
檜皮葺

あるしよの人へのくつきの月影をもる夜かくてこそ人もかへらむ
月のもる影をのきにひきそへてすまぬ秋のかせ
たゝへのくつをいひくもる夜なく月のさやさし
左も霧のしきひさ壁きとは佗きそ花を
よい歌も月とまてあはれもくらし　仍る左勝
ふこ歌
我とてのつゆをもかはぬ屋への人のかきもらぬし

影つけを先にすきそむらひさらやのまとむよ月やらぬ世なるに
左は壁への ひとうらふきにうかそひくとをいひて
無あり　右影つけをうきりしめてまことむ月やらぬ
とらあな下の句歌さるなるし　侍るへくや

三番

とぎ
塗師

いるをせんにうすもいちぬつき花にねなる月のこもれ
あらむとてぬきもちきにあらうみたけのとりにぬむしの月
左有み字ふれいすき両岸のひ花あら
海ほしや　右ハあらもしけぬあらぬを材電
またもへさる花　左右ともにまさしくてきこえ　持とす

て侍る一

いつまでうきなみだくだるなれなるのあるべき事のなかはさる辨

志ばしもとかぶらさふる物なるといひきこえなきてをとはや

左はよくよく心を練りて面白くきこゆれば持

と申侍るめり

四番　たかしつき　たこれり

左　はるかなりしのそで（紺）ひとしれぬのかはいろよひをそへてあきの夜の月

さやき　つゆやおきしぬれ色かたいのそでぬれきまする君も月影

右　大江親道のさいはいはてよきみえて右は新古

うる川くて志ほる月のさかるをかあてくもさいは

心ひく哉此也勝へくや

志の乃川あり所もいはぬもきらぬよりかちひとの恋ひけらん

ありつる志ほりておもひの今はそいつかはけてあはれみをあまし

さとよりよ歌さまよろし志みて情有るべきなり

八右の歌文字くまのみまでよくいひなへてすき

しいはさるよや中へてつらむ

五番　乱ものし　車つくり

くまなき水に新さまし八月をそへこそまけいれて左

さそろてきる涙つくらむ秋の夜の（轅）なるの月のおそくめくて八

左右月をまけいて車入月をねらへ次こ

義雄云四ノ句をこれより下ノ誤なるべし

しはらくのや　右も月はいへとも佳る人よみ上
たくみよくきこえ右勝よろしそ
あの事ハ左まさりと作あの活ちかバかどもまさりとこそ様たまりけの
その恋さへさりまされと海のめくり何へきたのことはか
たとへおもれ桜かるハかりとつけするを面白く
きこえ右も気ましまきこゆるを月の前なる恋の
歌にもめくりとあり婦ところせまきにまさる是ハ
左勝なるへし
　六番
名月ハ秋の紀にもその侍るへきまてひにて秋月なる　かな

あさけのすみうらみもこと何まちの月は志保にいつて
左右とも又八九月ならひの名月をよくよまれて有之
婦さそうけく志の月をほめ入右も秋の明月
よむといへとも春をおもひいつるのみ次第おさまる
心詠歌さと風情をとりなしあまりて仍以左
為勝
うらめしやつくまの氏家への何事と我何事ハ左うかるまさらん
我恋を志のゝ思ひてさりとていかなるいつてつ
左の前まてよむ撰集なとにも入られもそれや
作人たりといへとも名を残さし所也仍左の勝

七番 油うり ともしびうり

よひとよこゝろをつくしつるあふらもゑそのこるやまさきの月

是ハこの世ハ秋の田のとせいなるもちぬおほきまち出る山の名の津まで

左歌ハ面白くこそいへ今宵ハ秋や以て此にかへ

き右衛門ハあきの田のかりのいろもちぬきとまきる事と

きゝ侍りもちぬるよろしくへきにや

山さきや出て道のくあふらもちこゝほのかにたえて浪ニ事

なからへて君とねのこゝいふしらぬろうそくつゞけやつもせあてけるや

左右二首ともに未三句よりくらうわたせる事と

ろうせくきこゆその人付す所の古事を思ふに山さき

きのふハゞ事とす又あふらもしみぬいつれとも又ことこそ侍れ

をいま我有ともハ油うりとよめる本説よたよりなし

只あふらひと事へきにこそ又あく流とそくうきそこ

ひの心うすくや右ハともしに本説をいひ出てもちぬ

とかくをまはりしてよめるやさしく聞こえ侍と申へし

八番 筆ゆひ 墨うり

あてはかまりつめてするゝ筆のならきかなくよしらん月ぞさやけき

うちかへしいと思ふなからのはるゝかいの袖ならへき月の影かな

左筆つのまきつめてするといふをそあらぬき夜なも

らぬとよめるたくみ也右姑中納言道をのへて

こゝ迄文字ありてうつしよき待にて作るなり
あひくれといふゆふましたる紀人ハ夏毛のころのさかりこハさを
さかしさの鹿ものへ也ひとつねハ九条に此ころませはらぬや
ふてそゆくへくもなく推しろく此ころハうちすゝく
かくくちおもてもよきに持よし秋

九番（炭屋妃　小原女）

秋まてたちかへりもして妃すみ家妃のころとも月よ眺めて
ひとつ柴よさと出雲も大原木にかりもそれ入るの月
花八月をもてあそひ宮めくりにもしとも此風情為嫌
連哥なとにいひなりするよや本ハ哥合にいひけり

なにあるいふこの色あきよ郷にれもたこえなりけり
よきよし為持
すみかも何事よハかひ都しらおかうたうぬ思のはか
かわてすこ身の保それハまた木の雪をへらそうもなく排まし
たなせる雑なし右もたうとうすけ思をへらつて此き
の病あらといへとも色めうとまよせつつて為持

十番（馬かうふ　皮かうハぬ）

秋の夜よかくるあらからぬ馬かけ木をもしらぬ比河のそこの月
いふ家をえ取のちはらハ時あるもとそまハあらそこのよもすから消え
をたよしまよなのまて晴の月をよみ九八月のたえ人

何とかや哀左を遂具何とも物かたり勝の儀

むまれはくらしとこれの壱ち君のよしあるへきよかとしられいや

あさりへるたゆきふりけるかりけり我あはれつまと人をかすかに

左歌者平遠と判ほへてしはしまよせけり

此あるまし処かりなくもかう時又いかせ何にかや右より

まさ強の時かり好あるへき事眼前也此詞れ

なしといふなるへし為持

十一番 山人 浦人

秋さむき山のさとよまたくほどれすゝき夜つまむ也月影れ

風さむくこそ寝られせしつの志ま夜もすから月をこそ見れ

たほ(ぼ)のあかりく浪まにもよ月を思はせける優なり

左の右いさゝり人をやさしよねれ月まやすむといふをられ

ハ左しまれ何ますや此あるさ同也持まてこそハ待め

ひとまのすもたらき也何を畑のちまちるへきと詞のまる

ほそらきみきハよきつるたくなハ恋ふりへしてもくらぬき哉

左粟の数よしぬとの我種とそあるまや

右何からよろしく待つ哉候

十二番 木こり 草刈

かへるさのくさをつまてさ留しこれをひといつる也の端の月

夕霧の哉をく露みするかまことめて月影そさしへつくるを作留れ

左右ともよろしく侍りこの番持

やまならてたれか人の親に問ひしてかよをうしとしるらん人のよせねハ

あさ中つる君をはかれさるみあまくさ給ふしなるかさとも人すゝのめて

左ハ遠興あり右ハ山の周圍の奇をよくとゝのへした

て殊に詠へくや

十三番　忠保　杉
　　　　扇うわ

秋やこゝのよ月のひかりもさえし忠保うらはれ人の数のまつ知番

河辺よ志きねやの河らの風ふきて雲のゆかめの月をかくす

左右ハ清水の月をとらへんとすたか雲は知りめとし

しれきゝ雨ともも今まてしまさてまて我

いのふせむ志らぬ雨の数よりやせ春ひむくれにまたみハまか侍り

ありこゝろあやし沈の浅のうへきこひたちもとひとつねん人よそひの

左ハあやせくろむ事を兼說を以て河の兵忠保し

のみかり此むく此にかよく思ひかせるまや

右ハ道理をよく知くきこえ出まてか又字頭とまふ

おいく侍りた儀へくや

十四番　常うわ
　　　　志ちはとのうわ

さ敷山のこしあまきてうけよくくまま秋月の井よは光と秋

河きさもみ雨よのうらぬ月影ハ志かもとらん春まてしろいかの礼

左哥なし見るまほよハ見え侍るとと右は遠興あり

ことめつらしよりて為勝

人依まよけしともの名を報ひ悲しけ報も何かハ拂ましし
悪きとや人の見すらん朽ろいのきはつくまてよそなる浪を
左歌の名を報ひといひ人つまれくけ北なとよくと
可弘しらも右もて白いもの浪よきはつくら覚いう
さ故いろくろきまや右のうへ悪きおしつへしたり
依よこそ

十五番

ところの月もおなし松ハ白ひし日かくまて衣やハ悲しき今宵
ふらう何の見もてくるまし風に帰さハ月の何とひ衣おなくなり

たゝ本歌よりのまろき心も月をほめるよふにし侍り
左何となひとり上詞かにて侍らぬとおほえ侍らむい中
くまとやみを待らんも文いく仍以左勝
待つ人のさはりといひてきますせのしくまつら上雨をおもふも
はやくこそ六角町なる李奥代にねさきそかハ是をては
右六角町いくとき歌よも町を八市とことそよめる
又六かくまちなるとても奥をうらひと人いるよ雨まも
称たらつへくや

十六番

ひきそへてなるき夜ちる佗すめるかやうにけも忘らきのちらるの月

ゆふくれの山の端ちかきハまつこそ清らかにとゝ月まちいでゝ今宵
たゝ末ゆくの色ひきゆかしくおもしろ川坂やつゝまは
つゝきたるかへつるしの詞たゝよ紫かなり以左為勝
老の色つさえねのかしらてゆふらかの名をしつくしても今ぞ思さき
たゝあまや人をハひとしくなせつてゆきむちきりと契りけれハ
たそかれのそらけしくハ文たゝ詞也
たゝふせつのきれぬ興なるほとゝ右の為勝

十七番

秋ふかくぬるをハいろかはりにひきそへけありしろきむすその月
（むき桃かり／かりふきつくし）
かくれもなきこのまゝかへりて照月のおぼろげのなかにみだれ

たゝこれハきこゆるをそへけ月ころなや負詞あるか
殊更に文字をそひきれなるかへていへるまや右ハ満月
なとありけるさらけのきれ次も殊に称つけにくき
事ハ好む古風いさゝかの心をてまやこの為右勝
さる趣を志ハきてのやうにひきれぬことありしいとやかな
何しも思ふとゆかしかしつかふらけのきれてくみけてものゆかしかれ
たゝ志ハきこゆいとかりしさにみまいらにひきれたるさきしがえた
なかに右の文字いろかえてやきらん侍るにても末の句をさる
めてもいかにしきれてかきけて両思ひ無の気格より
きこえて為勝

おしつくし
義云下学集 飲食門
法論味噌 本朝南都ニ
法論時ニ用之故云尓
但世俗所言也

十八番

まむちう賣
ほうろみそ賣

うまつくれきいたゝきもちやまんちう此ほうのあるゆふつく夜かれ

夏までハさし出されしほうろみそまつさへ月の移ろしきの形

右左とりまさせる事なし丁あ持

抑ひひみて此梅くも油へちしのこゝろへき名を撰つさされ

まよくのこたふられにやこのほうろそそあろしいの上様小あれそれ

きこひくものころをつむさと云り

左もいまきうし思のこゝろ侍さへくや

十九番

うろいさき
さいちから

またえへしうまてみそあは名れも志ゝみ字よ月に以華如

一うニうめまゐえをつる津られさいそ垂てふる秋の夜の月

右左とりよ我道をふくいはそて志ゝも月をまさて

せまちつらへて為持

ほまらて我身をいよゝおほくみのうちをまちきうハむまそをさら

祢うぬげよかうつきしたる志せざいのちくひもるきぬ縫え之て事

左もなうらずみのうちをさしといふくうをせんとよめる右ハ

始をハうまふろきしそのへてちうらいれるさ過をずとの勝

侍らさん

二十番

ら頭ひきかく
諸くろし

さのもの風あらひまうくの町うぶと引しさんて如まてまある月け

うましくもひきかへしたつまつの木の月のみけむ旅にもひとりまされ

右首尾又あしからねは勝為持

左のうたをむかしは深さやふるきことひさねしてこそまれ作て如き

いまはられたるきこえてぬるをさせても猶ある源の縄のひくさうなれ

左右とも勝ちしあまりに毛を吹てきずをも

とむへうす又持とん

廿一番

さらわぼうて
ゆらうりきまわり

とむへき人もあらしなかゝ家を恐る井の月をのほりてやらん

ひとなれや秋を見月もいくゆくらちきみかちりもかなちまき哉

左めざまつき清水清ちとは中しく蘭者ゞしくまても

茶下

をそれなきことをそさしてつくりの身乃ほとすしらん

昇夜の光ひも何それなき人しも右ひとなれやとそよ

はらいくゆくうりいる秋のちりもなかぬなきと長しとい

ひとつせる優ちなうさるゝ何ら更同科にや

金てらとまさうやぬめすといひ昔して人の何かうきたちなきが哉

けこんひとゆくはかきれいつとなくたなれぬ世とおもひしまは

左も右もさる事しときこゆこれも又勝負なかるへし

廿二番

こゝをこゝと
あしたつくわ

年たらは又もきかせなんそのほとをあまけの月のさぬるせまや

山のをのなかなるつ中の番河だゞるゝ秋月は木の葉ちかゝり

左ハ月にむかひて風韻をとめて歌合の故実ちかき
ほやうてき歌ハよろし右ハ幽閑にくらへて本の句に
月をりてこそ見る幽玄を可備也

いつもよりなを見てしとかられをさしもへておもしろからしを
ひとりねの身ハわきもとかれやさしあはれなる心ちも侍れとこそあれ
左ハ哥さまのゆゑくさきこそ右ハ無興あり中三句
大事なる事とをさしはしとつけるもあてゝし
可為持

左二番　御夫あこかるとみし

雲とみてまきはらふかれたまさかなれいとさやかなる秋の夜の月

そらすみのうまやひきとからす衣のしたきらゝ照る月のけふれ
左右代雲の影のすゝれを月によりつけて詠侍る
右文字ハしあてゝから衣の心はよくきこゆるよき持也
人目さへあれたるかりしや屋ふれみまくほしきいつれにや
ひとりねむハひとりねのつれなさにつけてもこゝろもとなきを
左ハ風情あるに右ひとりの[illegible]のはるゝなれる心紀何よう
けふも可為持